

意識調査から見た中国人大学生のジェンダー意識

趙 凱 月 [鹿児島大学大学院人文社会科学研究科]

齋藤 美保子 [鹿児島大学教育学系 (家政教育)]

Gender awareness of Chinese university students observed from attitude surveys

ZHAO Kaiyue and SAITO Mihoko

キーワード：ジェンダー、結婚観、相続観、血縁観、役割分担

1. はじめに

中国では、「男女平等」の原則が憲法で明記され、女性の発展が経済・社会発展計画のなかに導入されている。また、「男女平等という基本国策を堅持し、女性と児童たちの合法的な権益を守る」と執政党の最高政治文書に明記されている。中国政府の関連部門の指導と全社会の努力のもとで、中国の女性発展の分野は大きく推進されており、経済、意思決定、健康、教育と環境等の分野では、女性の地位が恒常的に向上しつつあり、ジェンダー平等の状況が改善されている。しかし、経済、文化発展の状況は地域によって異なり、また、伝統的な文化の影響によって、一部の地域では、男尊女卑をはじめとするさまざまな問題が依然として存在している（独立行政法人国際協力機構中華人民共和国事務所 2016）。

2010年の第三期中国婦人社会地位調査により、女性の職場、政治への参加度が高くなり、家庭での意思決定機会も多くなっていたが、性差別、伝統的な性別役割分業状況の影響で、女性の社会進出がまだまだ阻害されているのが現状である。

世界経済フォーラム（WEF）「男女平等ランキング 2017」によると、中国は調査対象 144 カ国のうち 100 位であり、新生児の男女性別比のアンバランスの状況は最も深刻であり、企業における取締役を担当する役を務めている女性は 9.4% しかいないという結果が出している。

中国では、産前検査で胎児の性別を鑑定することが禁止されている。しかし、男児選好意識を持っている人は少なくないので、不法手段で胎児の性別を判別してから、妊娠中絶することを決める人は沢山存在しているのが実情である。中国統計年鑑によると、2016 年、男性人口は 70815 万人、女性人口は 67456 万人で、男性が女性よりも 3359 万人多い。また、2016 の中国人口性比では、正常比の 100:102~107（女=100）からずれ 0~4 歳児の性比は 100:115.62 である。こういう深刻なアンバランスの状況は自然要素との関連も完全には否定できないが、中国人の心に浸透している「男性を重んじ女性を軽んじる」固定観念及び男児選好意識の影響との関連も考えられる。

また、中国国家统计局のデータによると、2016 年の 15 歳以上の男性文盲率は 2.74% であるのに対し、15 歳以上の女性文盲率は 7.89% であり、明らかに多数である。これは「才能のない女は徳な

り」(女子无才便是德) という伝統的な思想が多くの人を持っているからであろう。

2. 先行研究

笹川あゆみ(2017)は、女性や男性にふさわしいと社会からみなされるような性格、行動、態度、ものの言い方、考え方などをもとに女性と男性を区別するあらゆるものがジェンダーであり、ジェンダー・イメージに基づく「男はこう、女はこう」という思い込みは、私たちの心の中に非常に浸透していると述べている(笹川あゆみ 2017)。

ジェンダー意識が強く若者の心に浸透した結果及び影響に着目すると、橋本芳(2005)は、仮に若年者たちが将来子どもを産み、子どもを育てていくようになったとしても、ジェンダー意識が強く残ることにより、家族間のジェンダー関係の再生産につながり、子どもの健全育成にとって、良い環境、良い状態とは言えないと述べている(橋本芳 2005)。

また、世界の多くの国や社会では、男性であることを基本とし、男性の視点から、政治・経済・軍事・教育などに関することが決定されてきたというジェンダー問題が笹川あゆみは指摘している(笹川あゆみ 2017)。¹ こういうジェンダー問題は現在の中国社会にも多少存在しているようである。

李金花(2013)は、経済の発展とともに、中国女性の経済、政治などの地位が大変改善されたが、今までも女性の発展する道には様々なバリアがあり、女性の十分な活躍は未だ実現されていないのが事実であるとしている(李金花 2013)。

任衛平(2008)は、新中国成立後の中国女性の地位、教育、就職などの変遷を述べたところ、①男は仕事、女は家庭という伝統的な社会通念が深く残っていた ②女性は職場で、男性と同等に競争するのに加え、家事、育児などの面で、男性より過重な負担をさせられることが多い ③男の子が血統を継ぐとの伝統的な思想が強かったので、女性にとって、男の子が生まれることによって、家庭内での地位が安定し、地位が高まる④家庭な暴力の被害者の多くは妻である との問題点をまとめている(任衛平 2008)。

中国で、一般家庭では男女が共働きの暮らしをしているのが現状であり、中国の女性は結婚しても、結婚や育児のために、仕事をやめるということは殆どないと任衛平が述べている(任衛平 2008)。

婚約条件について、現在の中国の女性は婚約者を選ぶ時に経済以外の条件が気に入っても、経済条件があまりよくないと、婚約に慎重になる傾向にあると任衛平が示している(任衛平 2008)。

全体からみると、女性の平均労働収入及び経済力は男性より低いのが現状である。中国都市部と農村部との女性平均収入はそれぞれ男性に対して 67.3%、56%であり、18歳～64歳の女性在职者の収入はほとんど低所得層と中低所得層に集中しており、持ち家を持っている女性は 37.9%であり、男性は 67.1%が占めていると第三期中国婦人社会地位調査で明らかにしている(中華全国婦連、中華人民共和国国家統計局 2010)。

¹ その男性とは、階級・身分が高かったり、支配的地位にいる人種・民族であったり、異性愛者であったりといった条件が付くと笹川あゆみが述べている。

このような、先行研究をふまえると、現在の中国においては、女性の地位が改善されたが、解決に迫った問題が未だ多く存在しているのが現状である。

3. 研究の目的と概要

以上の背景と問題意識から、本研究では、もうすぐ社会へ進出し、家庭をつくると考えられる大学生を対象として、現時点での大学生のジェンダー意識を把握し、現状の問題点を探っていき、考察することにする。また、世界では、中国人のジェンダー意識は進歩的なイメージがあるようであるため、現在中国人の若者のジェンダー意識の実態を調査し、その結果を世界へ明らかに示しようと思う。

本調査は2018年4月5日～2018年4月11日の間に、中国A大学における知人に依頼し、意識調査を行った。内訳は、女子学生134人、男性72人の計206人から有効回答を得た。

調査項目は、主に(1)性別役割分業意識 (2)結婚観及び結婚後の将来像(3)相続権に関する意識及び血縁観(4)保護者の就業状態及び家庭内の役割分担である。

4. 調査の結果と考察

4.1 性別役割分業意識

この部分では、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の4選択法で「家事、育児のため、女性は安定した、競争の激しくない教師などのような仕事をしたほうが良い。」「男性の主な責任は収入を得ることで、女性の主な責任は家事や育児することである。」「女性の人生において、仕事をするより妻であり母であることは重要である。」との項目の回答を得たところ、図1～3のような結果になった。

「家事、育児のため、女性は安定した、競争の激しくない教師などのような仕事をしたほうが良い」と質問をしたところ(図1)、回答者の中で、約3割の女性は賛成意見を持っているが、男性は「そう思う」「ややそう思う」と答えている者の割合はさらに多く、5割以上に達している。こういう結果から見れば、より多くの男子学生は「家事、育児は女性の責任である」または「女性は弱いので、責任の重い仕事はできない」と思っているだろう。具体的な理由については、再検討する必要があると思われる。

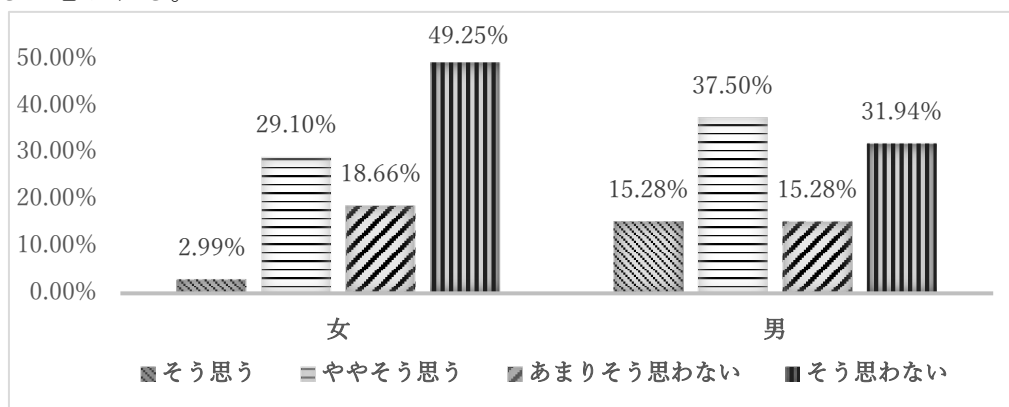


図1 家事、育児のため、女性は安定した、競争の激しくない教師などのような仕事をしたほうが良い (N=206)

「男性の主な責任は収入を得ることで、女性の主な責任は家事や育児することである」についての回答では（図2）、約1割の女子学生は「そう思う」「ややそう思う」と賛成しているが、4割以上の男子学生はこれに対する肯定的な意識を持っている。男子学生は「男は仕事、女は家事」という意識がより強いようである。こういう結果は「家事、育児のため、女性は安定した、競争の激しくない教師などのような仕事をしたほうが良い」との項目の結果からも支持される。

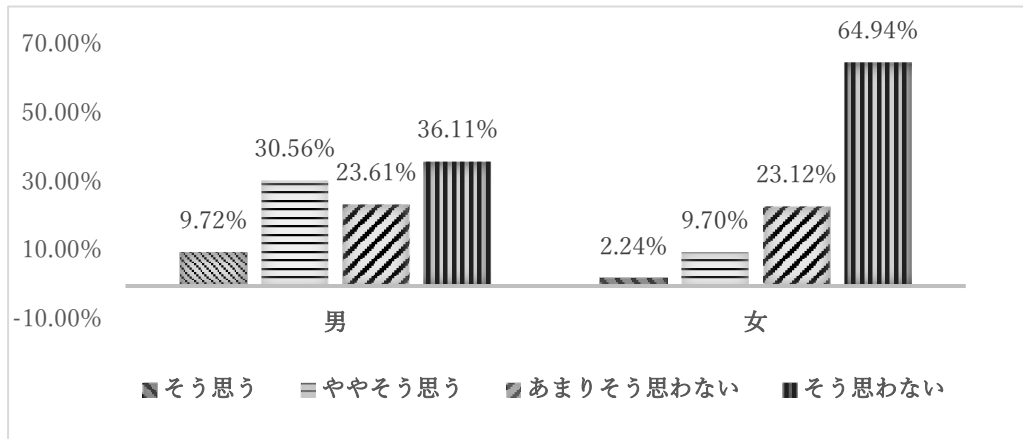


図2 男性の主な責任は収入を得ることで、女性の主な責任は家事や育児することである。(N=206)

図3が示しているように、「女性の人生において、仕事をするより妻であり母であることは重要である」という項目に、女性の「そう思う」「ややそう思う」の合計、17.91%（24人）に比べ、男性はより高い割合の55.55%（40人）が「そう思う」「ややそう思う」と肯定的であった。男女間の差が見られ、「家庭のため、積極的にキャリアを犠牲にする」と考えている女性は少ないだろう。

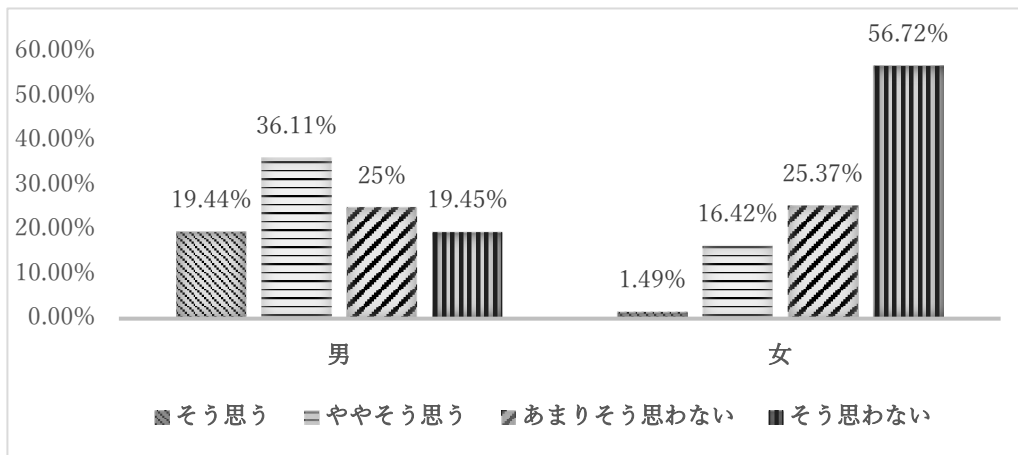


図3 女性の人生において、仕事をするより妻であり母であることは重要である。(N=206)

4.2 結婚観及び結婚後の将来像

中国には、「干得好不如嫁得好」（仕事ができるより、良い夫を探せるほうがいい）という言葉があったため、ある程度、女性の職場での向上心も弱化された。

そのため、大学生の結婚観を把握するため、結婚相手に求めている経済上、学歴上の条件と結婚することを決めた後、家を買う側の視点から調査項目を設定した。

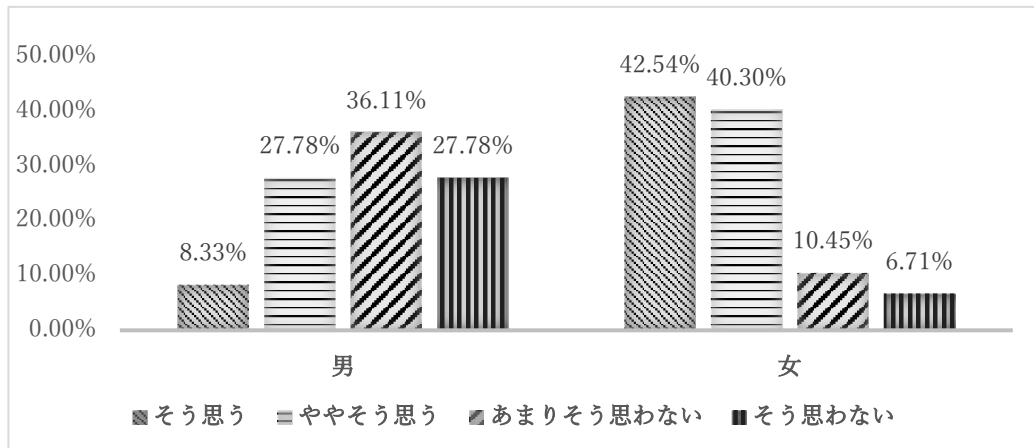


図4 結婚相手を選ぶとき、自分より収入の高い相手を選ぶ。(N=206)

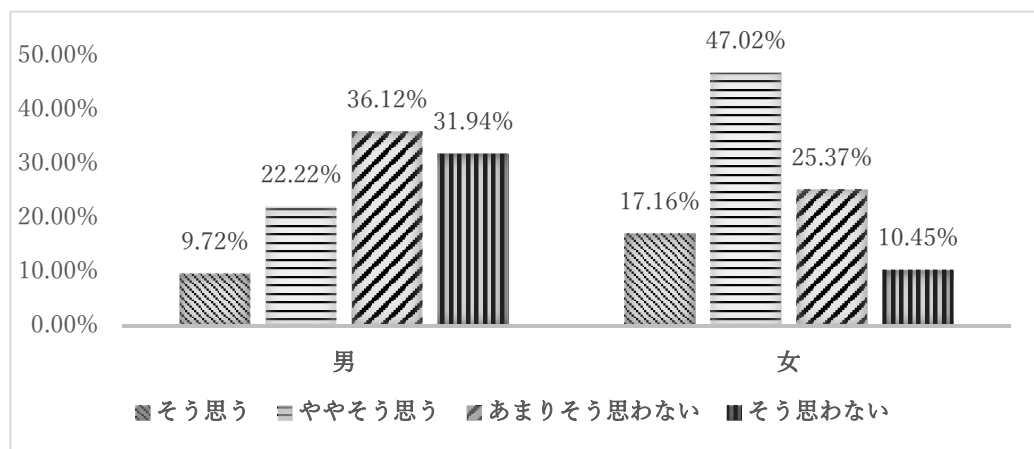


図5 結婚相手を選ぶとき、自分より学歴の高い相手を選ぶ。(N=206)

図4、図5が示しているように、約64%（86人）の女性は結婚相手を選ぶとき、自分より学歴の高い人を選ぶ傾向にあるが、約83%（111人）のより多い女性は相手の収入を気にすることがわかる。男性がお金を稼ぐ責任を持っていると多くの女性が考えているようである。こういう結果は現在の中国の女性たちの多くが相手の経済条件を第一の条件とするようになったとの任衛平（2008）の説明に合致している。女性のように経済力及び収入を重視していないが、相手の収入、学歴を求めている男子学生も少なからずいた。これは将来の生活の安易度、子ども教育、二人の価値観から男性が考えた結果だろうと考えられる。

結婚相手の経済力を求めることの「経済力」は、結婚前に家を買うことも考えられる。したがって、結婚前の住宅確保について言及することにした。

現在の中国では、男女が結婚する前に、女性の実家は大部分「男性の方が家を買うこと（頭金だけを払っても良い）」を条件として要求している。こういう影響下で、中国の若者の考えは一体どのようなものなのだろうか。

図6で明らかなように、回答者の中で、32.83%の女子学生、36.11%の男子学生は「男は家を買う責任を持っている」と考えている。調査対象の大学生はみんな結婚した経験がないので、回答と実際とは多少ズレがあるかもしれないが、男性は「男は家を買うべきだ」との意識がより強いである

ことは間違いないことがわかる。

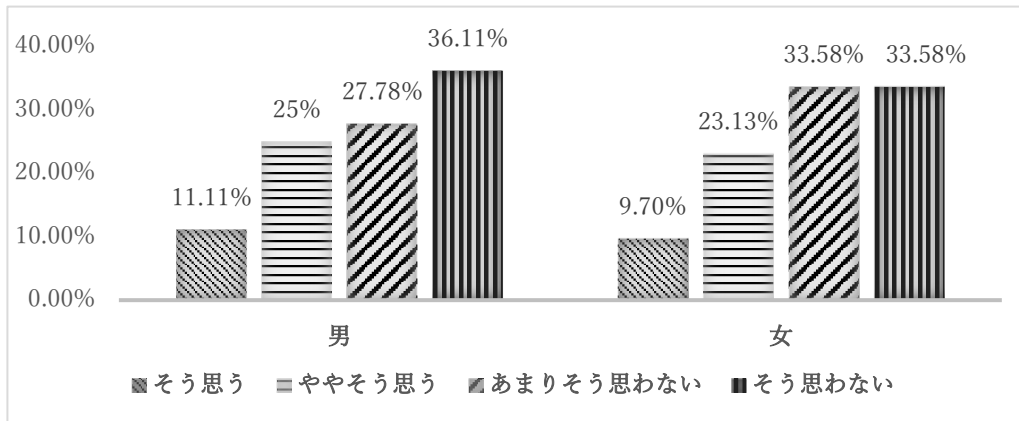


図6 結婚する前に、男性の方は家を買うのが当然のことである。(N=206)

結婚後の将来像について、結婚後の結婚相手への期待（家において欲しいか否か）及び理想とする子どもの性別の回答を得た。

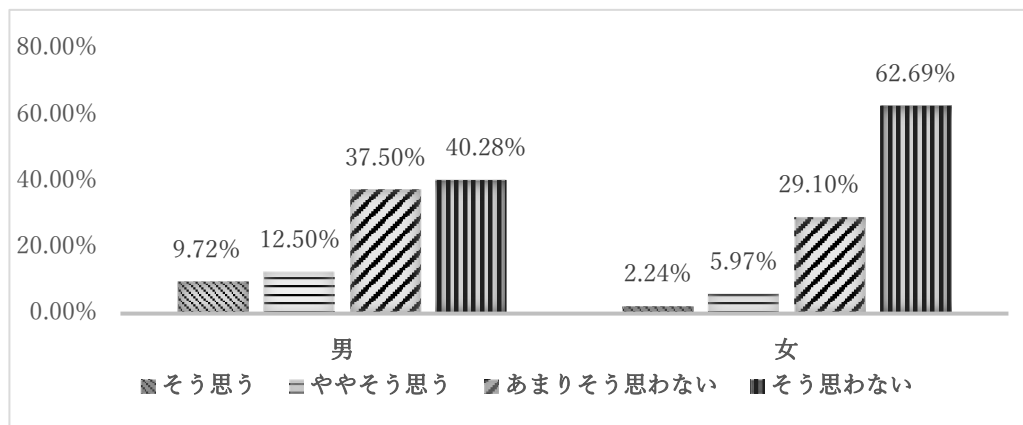


図7 自分の結婚相手は専業主婦あるいは専業主夫になってほしい。(N=206)

「自分の結婚相手は専業主婦あるいは専業主夫になってほしい」（図7）との調査項目の結果からみると、結婚相手に家においてほしいと思う男子学生も女子学生もあまり多くない。この結果と先述のように中国の家庭での男女共働きの状況とは密接な関連があると思われる。しかし、自分の夫を家において欲しがっている女子学生の割合は8.21%と極めて少ないとの結果も出ている。

一般に、妻は専業主婦として家事、育児に専念するのと理解できるが、夫は専業主夫になると、周りの人に「恐妻家」、「ダメな男」などと笑われるからだろう（徐安琪 2010）。また、先述の性別役割分業意識についての調査結果と整合し、分析すると、女性は家事、育児を担当させると同時に、仕事をするのも望まれていることが示された。

中国では、男児が生まれないことや、子どもが産めないことは、いずれも女性の非として離婚される第一の理由であった（任衛平 2008）。

そこで、大学生の子ども性別への期待を調査するため、「理想とする子どもの性別（仮に一組の夫婦に子どもは一人しか産めない場合）」との項目を設定し、「女の子」「男の子」の中から1つを選択してもらった。その結果（図8）、男女ともに半分以上が「女の子」を選択した。なぜならば、女の子を育てることより男の子を育てるのは経済的な圧力が大きいと学生たちは考えているのではないだ

ろうか。具体的な理由について、今後の再検討が必要である。

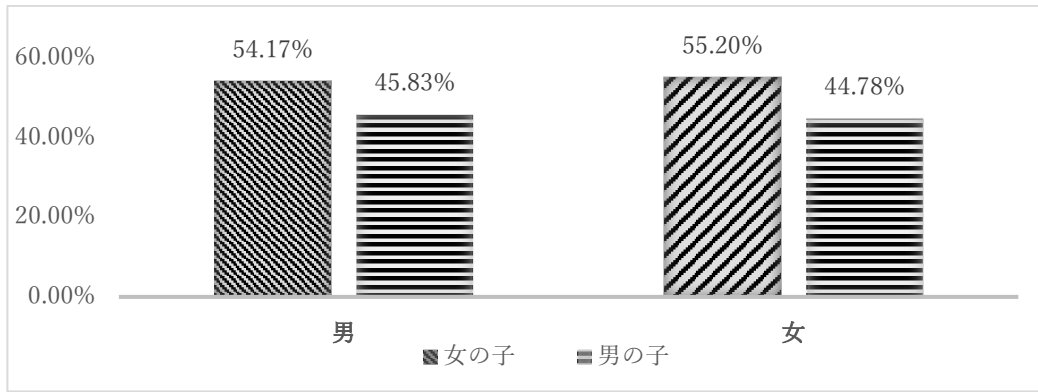


図8 理想とする子どもの性別 (N=206)

4.3 相続権に関する意識及び血縁観

先行研究で指摘したように、中国には、男子が家系を継ぐという伝統的な思想があったため、高等教育を受けている大学生の相続権に関する意識及び血縁観を問うことにした。

図9より、16人(約12%)の女子学生しか「女性より、男性の方は家業、財産の相続権を持っている」に対して肯定的な意見を持っていない。しかし、男子学生の28人(約39%)はそういう言葉に賛成している。

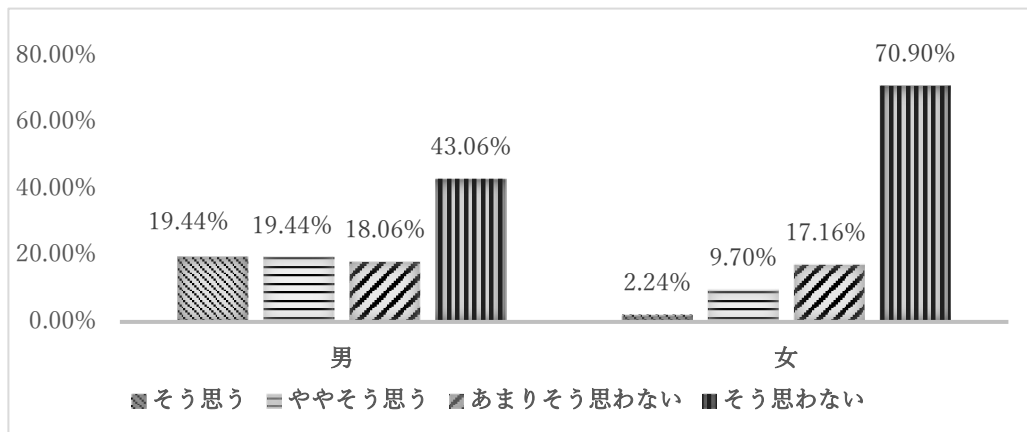


図9 女性より、男性の方は家業、財産の相続権を持っている。(N=206)

また、図10が示しているように、女子学生と比べ、より高い割合の男子学生が「女の子より、男の子は家族の血縁を継いでいる」と考える。

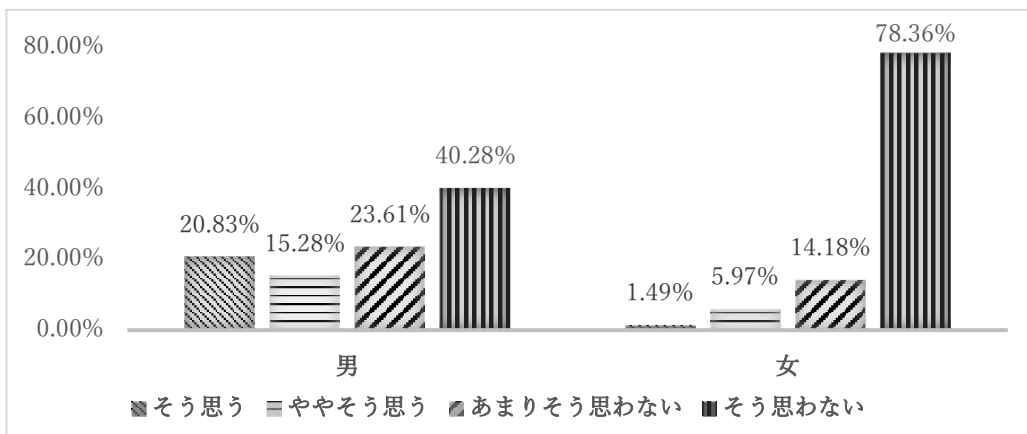


図10 女の子より、男の子は家族の血縁を継いでいる。(N=206)

4.4 保護者の就業状態及び家庭内の分業状況

家庭内の性別分業状況は子どものジェンダー観に影響を与えると思われるので、この部分には、調査対象の保護者の就業状態と家庭内の分業状況を問うことにした。

保護者の就業状態を「共働き」「父親だけ仕事している」「母親だけ仕事している」「その他」で回答してもらった結果（図 11）、全体では「共働き」が 121 人（58.74%）、「父親だけ仕事している」が 32 人（15.53%）、「母親だけ仕事している」が 6 人（2.91%）、「その他」が 47 人（22.82%）であった。大部分の家庭は共働きであるとわかった。

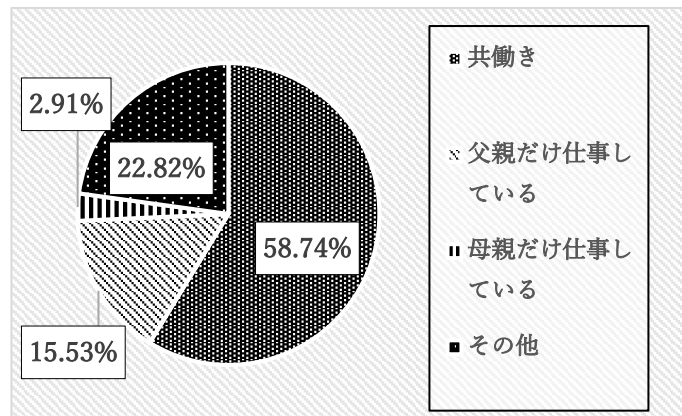


図 11 保護者の就職状況 (N=206)

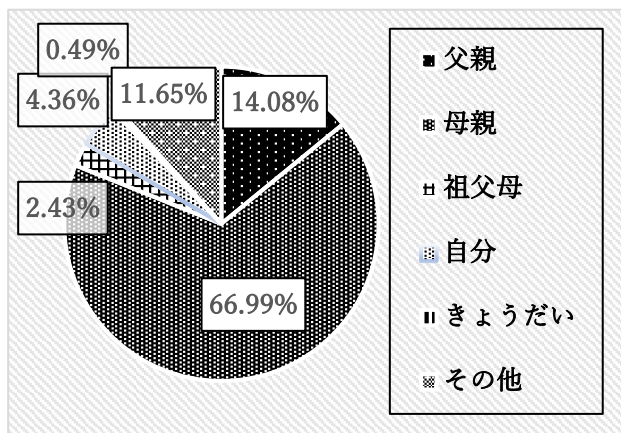


図 12 家庭で、一番家事をする人 (N=206)

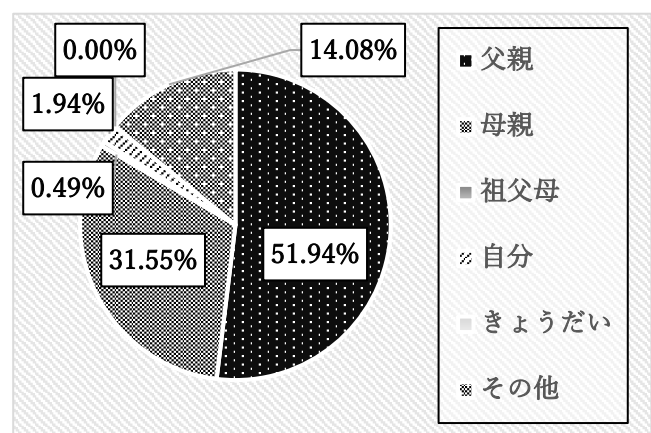


図 13 家庭で、一番決定権を持っている人 (N=206)

家庭内の分業状況は主に家庭内の家事分担及び重大事項決定権の問いかけをした。「家庭で、一番家事をするのは誰か」と「家庭で、一番決定権を持っているのが誰か」との質問をしたところ（図 12、図 13）、大部の家庭で、家事をするのは母、決定権を持っているのは父であることが明らかになった。

以上の結果をまとめてみると、多くの共働きの家庭の中でも、一番家事をするのは女性であるという事が分かった。

5. まとめと今後の課題

大学に通っている若者を調査対象をとって、性別役割分業意識、結婚観及び結婚後の将来像、相続権に関する意識及び血縁観や保護者の就業状態及び家庭内の分業状況を調査することにより、得られた結果は次の通りである。

(1) 男女別にみると、女性にとって、仕事より家事、育児が重要であると考えている男子学生は多い。女性に収入を得ることを望んでいない男性も少なくないが、共働きの家庭が一番多く、母親だけ仕事している家庭は極めて少なく共働きの家庭でも、女性の家事分担量は男性より多いのが事実である。そのため現在、沢山の女性が二重負担を担っていると思われる。

(2) 大部分の女子学生は結婚相手の経済力及び学歴を求めている。そして、学歴と比べ経済力をより重視している傾向がある。「干得好不如嫁得好」(仕事ができるより、良い夫を探せるほうがいい)という観念に捉えられている女子学生が少なくない。

(3) 男子学生の意識で高率なのは「女の子より、男の子は相続権を持ち、家族の血統を継いでいる」であった。しかし、将来の子どもの性別の期待では、女子学生の選択傾向と同じであり、半分以上が「女の子」を選択した。

(4) 全体から見れば、男子学生は女子学生より伝統的な性別役割観を重視していることが明らかになった。そのため、男子の方が女子より意識改革は必要であると考えられる。

(5) 「母親は家事する、父親は重大事を決定する」との家庭内の役割分担は当代大学生のジェンダー意識に影響しているだろうと推測される。

以上の結果により、伝統的なジェンダー意識が若年世代にまだ残っており、理想と現実、男性と女性の意識の差が存在している。こういう状況を改善するため、家庭内に限らず、社会、慣習、文化、教育などでのジェンダー意識の改革も求められている。

今後の課題としては、本研究において行った意識調査は一つの大学で行ったのみであったため、全国の実態を表しているとは言えない。今後、さらに多くの地域で調査を行う必要があるだろう。また、調査を通して、大雑把な傾向がみられたが、こうした性別役割分業意識の形成要因まではまだはっきりと分からないので、これから、インタビューなどの方法を通して、形成要因及び解決策を発見しようと考えている。

おわりに、意識調査にご協力いただいた皆様へお礼を申し上げます。

引用文献

1. 独立行政法人国際協力機構中華人民共和国事務所 (2016) 「中華人民共和国 中国ジェンダー動向情報収集・確認調査報告書」.
2. 橋本芳 (2005) 「大学生のジェンダー意識の差～佐賀大学の日本人学生および中国遼寧大学生の比較分析から～」. 佐賀大学農彙, No.90, pp. 1～14

3. 李金花 (2013) 「当代中国女性发展的现实境遇问题探析」. 蘭州学刊, No.7, pp. 104~108
4. 任衛平 (2008) 「中国女性の世界」. 九州国際大学国際関係学論集, No.3, pp.89~101
5. 笹川あゆみ他 (2017) 『ジェンダーとわたし』. 北樹出版, 東京
6. 徐安琪 (2010) 「家庭性別角色态度: 刻板化傾向的经验分析」. 婦女研究論丛, No.2, pp.18~28

参考文献

1. 浅井春夫・子安潤・鶴田敦子・山田綾・吉田和子 (2006) ジェンダー/セクシュアリティの教育を創る 総頁 320 明石書店
2. 天野正子・木村涼子 (2003) ジェンダーで学ぶ教育 総頁 295 世界思想社
3. 中華人民共和国国家統計局 (2017) 「中華人民共和国国家統計局人口統計データ」.
<http://www.stats.gov.cn/tjsj/ndsj/2017/indexch.htm> (最終閲覧日 2018. 05. 21)
4. 第三期中国婦人社会地位調査課題組(2011) 「第三期中国婦人社会地位調査データ報告」. 婦人研究論丛, No.6, pp.5-15
5. 朴木佳緒留 (1993) 性役割をのりこえて 総頁 330 ドメス出版
6. 堀内かおる (2001) 教科と教師のジェンダー文化—家庭科を学ぶ・教える女と男の現在 総頁数 198 ドメス出版
7. 木村涼子編著 (2009) ジェンダーと教育 日本の教育と社会 ⑩ 総頁数 42 日本図書センター
8. 世界経済フォーラム(2017) 「男女平等ランキング 2017」.
<http://reports.weforum.org/global-gender-gap-report-2017/> (最終閲覧日 2018. 06. 23)
9. 筒井淳也 (2017) 仕事と家族 総頁数 207 中公新書
10. 鶴田敦子 (2000) ジェンダーエクティを拓く家庭科 総頁数 242 かもがわ出版
11. 鶴田敦子・丸岡玲子編著 (1999) ジェンダーの視点から教育改革を考える 総頁数 78 フォーラム・A